

TS人外娘sがVtuberやる話。

匿名設定

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神秘的なやつ「じゃ、100万人まで頑張ってね♡」

TS人外娘s「「おい、ちよつと待て」「」

こんな感じの話。V t u b e rものは書いたことがないので他の方々のものを参考に試行錯誤で。拙いですが、ご注意を。

目次

## TS人外娘sがV t u b e rやる話。

「こんこーんっ！ 狐島妖きつねしまあやです！ 元気にしてましたか？」

夜の九時。そんな挨拶を決めて、彼女の配信は始まった。

パソコンに映し出されるのは、学生服を着た狐の耳と尻尾を揺らした女の子——D & A所属のV t u b e r、『狐島妖』の配信だった。

『こんこーん！』

『こんこん！』

『こんばんこーん！』

『元気だったよー！』

『仕事中だけど見るよ！』

『仕事中ニキ自重して？』

彼女の挨拶に、ノリのいい好意的なコメントが寄せられる。そのことから、彼女の人気がうかがえた。

「さて、みなさん。今日は何のための配信か、当然わかってますよね？」

『もちろん』

『当たり前』

『わかってるに決まってるんだろ何のために有休取ったと思ってるんだ！』

『社畜ニキも落ち着いて…』

「ふふ、では前振りとかはいらなさそうですね。では、早速始めていきましょうか！」

そう言っただけで彼女は、かちやかちやという音と共にパソコンをいじり始める。そして登場したのは、同じ制服を着た三人の少女たち。彼女達の登場に、リスナーは心を躍らせ、その時を待つ——

——ガツシヤアン！

「いったあ!?!」

しかしそれと同時に、何かが倒れるような大きな音が響き渡った。

「ぴいつ!? 何っ、何してんの!?!」

「!?」

『耳ないなった』

『悲鳴助かる』

『助かる』

『何事!?!』

『助かってねえで心配してやれ』

後ろから鳴り響く音と少女の悲鳴に、さしもの妖も思わず頓狂な声をあげて振り向いた。この一幕はリスナーには見えていなかったが、経験則から、だいたい何が起こったのかを察する。

「妖さん、お構いなく。英莉さんが倒れただけです」

「それはわかってるよ!?! 耳キンキンするんだけど何やってんのって話!」

「英莉の馬鹿が張り切って声出そうとして倒れた」

「簡潔な説明ありがとう……じゃないよ!」

配信始まってからのわちゃわちゃに、妖はツツコミ続けていた。メンバーの声が聞こえるにも関わらず、誰も自己紹介が始まらない。そんな珍事にリスナーは困惑しつつ、大いに笑っていた。

「いったた……ひどい目にありましたわ……」

「英莉、大丈夫か? コラボ枠でいきなり転げ落ちるとは……恥を知れ」

「そこまで言いますの宇美さん!?!」

「はいそこまで。早くしないと、リスナーが困ってしまいますから」

「私も困ってるんだけどなー」

そんな妖の言葉も虚しく、三人組はことごとく無視。配信が始まって5分ほど経っているが、これだけでなんとなく、彼女たちの立ち位置がわかる。

「はあ……とりあえず、自己紹介してくれる? 配信始められないから……」

「それもそうだな。よし、元気か? リスナー。小单宇美だ」

「こんおにく。天鬼蝶あまぎです。今日もいい夜ですね」

「いった……こん、ドラあ……馬鳥英莉、ですわ……」  
『草』

『元気だ』

『こんおに！』

『こんド……ラ？』

『えりりんだけ満身創痍で草』

配信開始から始まった四人のコントに、雰囲気もだいぶ温まり、コメントが次々と流れていく。そんなリスナーの様子を見て、妖は満足そうに頷いた。

「よし、リスナーも集まってきたし、それではチャンネル主として、音頭を取らせていただきますー！」

「妖に音頭をとるほどの気概があるとは思えんが」

「可愛い狐さんですもんねー」

「はいそこうるさい！ では早速『D & A』デビュー3ヶ月！ 記念オフロボ』！開始したいと思いまーす！」

そう、彼女たちが配信しているのは、いわゆる記念枠のためだった。とあるV t u b e rが立ち上げた事務所選ばれた四人がV t u b e rとして活動し始めてちょうど3ヶ月。個人が立ち上げるとして相当の話題になった。

狐島妖は狐の尻尾と耳を。天鬼蝶は鬼のような角の生え、小单宇美は褐色肌の見た目幼い少女。そして馬取英莉は翼と八重歯が特徴的な吸血鬼と明らかな人外の様相で、そんな少女たちの掛け合いは今でも数万人が視聴しにくるあたり、彼女たちの人気がうかがえる。

『段取りは息してますか……？』

『段取りとかあつたんです？』

『神風水鶏 大丈夫かあんたら……』

段取りや台本もなくぐだぐだとしだした四人を見て、コメント欄は茶化すようなコメントで溢れる。しかしコメントはどれも楽しそうに、荒らすようなコメントは少ない。これも彼女たちの人気の一つなのだろう。

そんな中、神風水鶏かんなぎくいと書かれたコメントに、英莉は反応する。

「あら、水鶏さんが来てますわよ？」

「ええっ!? 水鶏ちゃん!？」

「え、水鶏さん、仕事で見に來れなかったのでは？」

『神風水鶏 そんなもの、とつとと終わらせてきたわ』

『噂に違わぬママみを感じる…』

『さすがツンデレ』

『神風水鶏 ツンデレじゃないから!』

『ママは否定しないのね』

神風水鶏。

所謂、彼女たちの所属する事務所、〃D&A〃の社長である。V t u b e rとして活動する傍ら、個人勢でありながらもそのイラストや言動から一定の人気を誇る人物である。

「ほら、水鶏さんもそう言っていますし、とつとと始めませんか?」

「あんたが発端でこと忘れてない?」

「まあまあ。とにかく早速、質問返答コーナー」

「今回は〃わたあめ〃で質問募集をした。たくさんわたあめをくれた君たちに感謝する」

「それ私の仕事オ!」

『お、乗っ取りか?』

『チャンネルを取られる狐がいるらしい』

『ここはD&Aチャンネルだぞ。何も問題ない』

「いや私のチャンネルだから! まず一つ目ね!」

「やけくそですわね」

他人のの言葉などなんのその。妖は乗っ取らせてなるものかとパソコンを叩く。

「〃D&A〃の皆様、デビュー3ヶ月おめでとうございます!

オフコラボとのことですが、今日は何してましたか!」

「あー、ご飯食べてたね。家で」

「うむ、ちなみに私が作った」

「拙も手伝いましたが、美味しかったですよ。ミートソースパスタ」

「妖さんが顔からパスタに突っ込んだのが印象的でしたわね」

「ちよっ!？」

『草』

『いや、そうはならんやろ』

『なっとるやろがい!』

「いやいや、弁明させて！ 椅子の足が壊れたの！」

「あれは見事でしたね。まさか座ったタイミングで足のネジが抜けるとは」

「奇跡だったな」

『やはり不憫』

『そういう運命なんだなって』

『これは狐』

「不憫なこと狐っていうのやめてくれない!? それにさつき英莉ちゃんもが転んでたでしょ！ 同じだよ！」

「いや、妖さんののはこう……運命とか、因果的なものを感じますわ。この前だってし——」

「はいストップ。妖さんが不憫。それでいいでしょう?」

『はい』

『賛成』

『禿同』

「よくないよ!」

妖が必死に弁明しようと叫ぶも、結局妖が不憫という結論で固まってしまうコメントに、妖はそれ以上何もいうことができなかつた。

「なんか釈然としないんだけど……」

「諦めなさいな。それでは次——」

【皆さんはどうして“D&A”に応募したんです? キリキリ吐け】

『あー』

『そういえば聞いたことなかったわ』

『気になる』

『ん?なんか聞こえないぞ?』

『あれ?』

そのわたあめが表示された瞬間、彼女たちの声に、困惑が混ざり始



めた。そんな空気を察し、コメント欄は訝しむような雰囲気の流れ始めた。

「あー……うん、えっとー……なんで説明すればいいかなー？」

「それは、ですわね……」

「ちよつと恥ずかしいというか……」

「うむ、なんというか」

「え？」

『なにになに』

『恥ずかしいとは？』

煮え切らない態度でデビューした理由を濁す彼女たちに、コメント欄は困惑に染まっていく。

しかしその時、一つのコメントが流れた。

『神風水鶏 私が誘ったもんね』

『なん……だと……』

「あ、そ、そうそう！」

「……私たちは水鶏に誘われてデビューしたからな」

『神風水鶏 昔からの付き合いで、この子たちに配信させたら面白そうだって思ったの』

『はえー』

「わたくし私たちが面白いって言われてデビューするというのは、何というか……」

「拙たちが芸人みたい、と言われてるみたいで恥ずかしくて」

『なるほど』

『素で芸人みたいって思われてんのが草』

『知り合いだとは思ってたけど、水鶏ちゃんとそんな仲よかったんだな』

『神風水鶏 まあね』

『それで人気出てるし、水鶏ちゃんすごいな』

「そ、そんなわけぢよつとね？」

「というわけだ。あまり蒸し返してくれるな」

「では、気を取り直して、次に行きましょう——」

その後、”D & A”の配信は筒がなく進み——最終的に、同時視聴五万人を超える盛況のまま、終了の時間が訪れた。

「じゃあ、今日はこれでお終い！ おつこくん」

「良い夜をお過ごし下さいね」

「おつドラですわ」

「さらばだ」

『おつこーん』

『おつおに〜』

『おつドラ〜』

『さらば』

『おやすみ〜！』

その言葉を最後に、配信を切った。

配信が切れていることをしっかりと確認して、彼女たちは息を吐いた。

「はあ〜終わった……」

「少し、疲れたな」

「今何時〜？」

「目を跨いだぐらいだと思えますわ。でも、それにしても……」

四人は、視線を合わせて息を吐いた。そして同時に、同じことを口から吐き出した。

「」「焦った……」」「」

そう吐き出した彼女たちは、思い思いに行動し始め、愚痴をこぼし始める。

妖は尻尾に手を伸ばして。

蝶は角に指を這わせて。

宇美は小さな体を必死に伸ばして。

そして英莉は翼を力尽きたように降ろし、脱力した。

『デビュー理由、ちゃんと話すとけばよかったなく』

「水鶏がいなかったらまずかったな」

「ええ、理由を答えられないのはまずいですしね」

「助かりましたわね……」

その時、通知音が鳴る。その相手は――

『お疲れ様ー』

「水鶏ちゃん！」

神風水鶏、その人だった。

水鶏の「大丈夫？」という言葉に彼女たちは言葉を返していく。

「本当に助かった。感謝する」

『あんたら、聞かれることは予想できたでしょうに。あたしがいなかったらどうなったかと思ってるの』

「本当に助かりました。ご迷惑をおかけしてすいません」

『いいのいいの。こういうのも言われてるからね。あ、だけど妖。明日そっち行くから、触らせてね』

「……拒否権ないんですよ。わかってますよ、わかってます」

尻尾の毛繕いをしながら、耳をぺたんとなため息をこぼす妖。「蝶たちに散々触られたのに……」と嘆く姿は、彼女が不憫と言われる所以を感じさせる。

『しっかし、あんたらも大変よね。性転換の上に人間やめさせられるって』

「そんな私<sup>わたくし</sup>たちのママになれって言われてやってる水鶏さんも相当お疲れだと思うのですけれど……」

『まあ、相手は神様、だしね』

そう言つて苦笑する水鶏に、四人は乾いた笑いを浮かべる。

――そう、他でもない。

D & A。

誰も知らないその正体は、神によつてこの世に現れたりリアル人外にして、性転換させられた少年たちであった。

すべての始まりは、彼女たちがデビューする1ヶ月ほど前。

突如としてマンションの部屋の一室で姿も名前も変わって目を覚ました少年（少女）たちは、神なる存在からVtuberをやることを命ぜられ——それから紆余曲折あり、今に至るわけである。

「本当に、いつになつたら元に戻れるのかしらねえ」

「神が言っていただろう。登録者100万人を突破する。それが私たちが元に戻る手段だ」

「まあ、それしかないんですけどね」

「地道にやるしかなさそうだよね」

『あんたら軽すぎじゃない?』

「まあ、急いても仕方がないしな……」

こうして、明日のネタ作りに入る。お金はもちろん、登録者を増やすことを目的としているため、ネタ作りを欠かすことは許されない。

最近では水鶏も手伝うようになり、彼女たちのネタ作りは深夜に及ぶことだつてある。そうなれば当然、眠くなる者も出てくるわけで。

深夜1時を回った頃、蝶が「くあ」という欠伸を漏らした。

「……さて、もう拙は寝ますね。こんな時間ですし」

「そういえばそうだな……私も寝よう」

「あ、おやすみ」

「おやすみですわ」

『どうせ妖夜行性組と英莉は寝ないでしょ? ゲームしない?』

「あ、いいですわね」

「じゃあそこにレースゲームが……」

『格闘ゲームにしましょうか。スマクラとか』

「私の意見全無視!?!」

こうして、彼女たちの一日は終わる。

目標は登録者100万人の境地に到達すること。それまでの道のりは、まだまだかかりそうだった。